バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 146 号　〔2017 年 4 月〕

さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋‥＋

主の聖名を賛美します。 バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第 146 号をお送りします。今月は、毎年 1 度お越しいただいている井野葉由美宣教師にいらしていただき、キリストの聖餐に関する深く温かいメッセージをいただきました。

先週木曜日が記念日だった『最後の晩餐』を記念して行う『聖餐式』は、人がそうしようと決めて行う儀式ではなく、イエス自身が定めた儀式です。最後の晩餐の時に食べられたパンは「種無しパン」、つまりイースト菌を使わないパンです。これは、モーセの時代にヘブル人がエジプトに奴隷にされた状態から、神の介入によってエジプトを脱出することになった時、発酵を待つ時間を節約するためにイースト菌を入れずに焼いたパンを作って持参し、イスラエルの地へと向かった事を思い起こさせるためです。このパンを見るたびに、その時の神様の御業を思い出して感謝しました。これに倣い、聖餐式に今でも膨らまないパンを用いている教会もあります。

主イエスは「私はパンです。私のパンを食べればあなた方は永遠に生きる」（ヨハネ 6:51）と言われたと書かれてありますが、これは「イエスの身体（人肉）を食べる」という事ではなく、主イエスを自分の心の中に取り入れるという意味です。その主イエスとは、十字架での磔刑によって死亡したものの 3 日目に復活して生き返った、つまり「死」を滅ぼす勝利の力を持っている方、その方の命を自分の中に取り入れるということです。

死人の復活ほど信じがたい話はない (I コリント 15:12-)。しかし使徒パウロがここでも語っているように、この事件は本当に起きたのです。あまりにも衝撃的ななこの事実を、語るなと禁じられ拷問を受ける危険を冒しても語らずにはおれなかった証人たちが語り続けたから、2000 年以上経った今でもこの事が伝えられ、キリストへの信仰が続いてきたのです。復活を信じることは信仰の力なのです。そしてこの力は努力して得るものではなく、ただイエス様から頂くだけです。これをいただく（食べる）と私たちの中に栄養（体の一部）となり、命となるのです。

聖餐式に飲まれる葡萄酒は血を象徴しています。ユダヤ人は旧約の時代から、契約を結ぶごとに羊や鳩を屠るなどして血を流し、印としてきました。日本でも昔は血判（刀で指を傷つけて押印する）が存在しました。しかし新約の契約で流れた血は唯一主イエスが十字架で流した血のみです。本当は私自身の血によって赦される（神から離れた罪について和解の契約をするべき）はずが「イエスが肩代わりするからあなたは血を流さなくてよい。あなたの罪はこれで全て赦された」ということを思い起こす儀式です。私たちは既に神に赦され受け入れられているのです。

では主イエスを信じるためには何が必要なのでしょうか。それは「私にはイエス様が必要だ」と認識することです。それは病気で手術が必要な時、「手術してください」と承諾しないと医者は手術ができないのと同じです。「私にはイエス様が必要です」と認識して主を呼び、心に入ってもらったときに受けるのが復活の力です。（※）どのような逆境もプラスに変えてくださる力。人間にはできない力を持たせるのが信仰の力、復活の力です。それは主が私たちの内に生きておられるからです。忘れやすい私たちが、その力を既に受けていることをもう一度思い起こすために、私を食べ、飲みなさいと主は招いておられるのです。

（※）バタフライスキンという名で知られる重度皮膚病を患って出生し、1 日中痛みに耐えながら生きている少年、マーキー君が、復活を歌った讃美歌を聞いた瞬間から復活への信仰を得、苦しみに満ちた人生が変えられた彼のドキュメンタリーが、奈良福音教会メッセージで紹介されました。（24 分 30 秒時点から 7 分間の映像）ぜひご覧ください。
https://www.youtube.com/watch?v=lXnUXSwZuD0